

編集後記

◇このところ冷え込みが強く、甲府盆地は一気に冬の気配。『市史研究』第六号をお届けします。

今号の論考は遺跡発掘調査報告を除き、テーマは近・現代に集中しました。

卷頭の「齋藤論文」は、昭和戦前まで甲府における産業・経済の支柱であった製糸業について、昨年行なった関係者による「座談会」を緒とし、独自の手法と史料分析によって、「生死業」ともいわれ相場に深く関わりを持った、甲府の製糸業の特質や構造のメカニズムを解き明かそうとするものです。またこれに関連した山本委員「製糸女工と製糸業」の論考は、製糸業の影の支えであった女工さん達にスポットをあて、当時、彼女達がどのような職場環境や労働条件で働き、何を考え、暮らし向きはどうであったかなどを、体験者を足で訪ね、ためらいつつ語られる言葉の節々にそれを探り、記録として止めておこうとするものです。

◇さて今号は前号の特集号に続く日を待た

ずしての発行で、当初は本巻（史料編）との編集日程が重なるため、予定どおり発行できるかどうかの懸念もありましたが、どうやら間に合いました。市史の刊行物は、本誌以外にも『市史編さんだより』、『史料目録』それに市史本巻（史料編・別編・通史編）などですが、お陰さまで市民皆さまの力強いご支援と委員各位のご熱意によって、いずれもほぼ計画どおりの刊行をみているところであります。

◇とは申しますものの、全体からみますと未だ半道中、いよいよ胸つき八丁に差し掛かり、事務局も一層気を引き締める昨今です。今回はこの場をお借りしてそれら市史刊行物の編集に携わる事務局・裏方諸子の紹介をかね、次にコメントを載せさせていただきました。

（高木）

◇『市史研究』の編集も六回目となりました。この間、作業がなるべくスムーズに進むようになると、レイアウトの仕方や図版の作成など様々な面で改善を加えてきたのですが、校正作業だけは一字一字点検するしか方法がないようです。「自動校正マシーン」が一日も早く開発されることを願つてやみません。

（数野）

◇北風の冷い季節がやってきました。『市史研究』愛読者の皆様お元気ですか。ただ今、『甲府市史』史料編第六巻近代の入稿準備に追われる毎日です。北風が春風に変わる頃には、きっと皆様に満足していただける市史をお届けできると思います。ご期待下さい。

（飯室）

◇何故か市史編さん担当には女性が多く、史料編三巻同時編集の真只中の現在は部屋中にあたふたとハイヒールの音が鳴り響き、忙しさに拍車をかけています。

（桑本・旧姓芝田）

古代・中世・近世担当の私も三時代同時入稿準備に忙殺され、一日も早く史料編の完成することを心待ちにしている今日この頃です。

（桑本・旧姓芝田）

◇甲府に嫁いで一年八ヶ月、編さん室在職満一年。目下正しい甲州弁を習得しようと、編さん室に訪れる方々の会話によく耳を傾け、又『甲府市史』民俗編の方言の節を読み勉強中というところです。

（甲府市史）

第二回配本も売れ行き好調ですが、市内の方ばかりでなく、市外・県外の方々にも読んでいただきこうと、既刊分のパンフレット送付のため宛名書きに精を出している毎日です。

（小池）